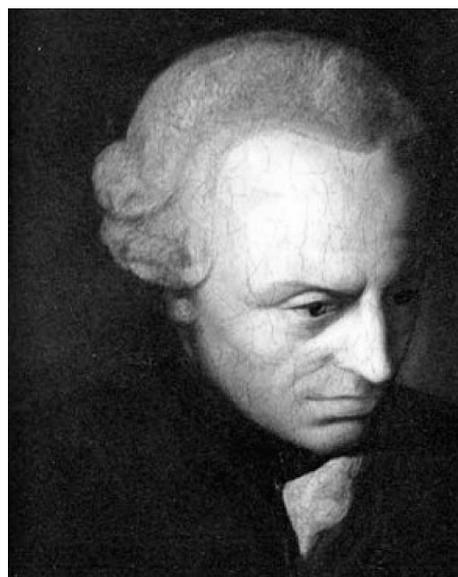


純粹理性批判“超”入門

目次

- I. はじめに ……………1
- II. 純粹理性批判“超”入門 ……………2
 - i-1) イマヌエル・カントとは ……………2
 - i-2) 純粹理性批判の成立 ……………2
 - ii-1) 形而上学とはなにか ……………3
 - ii-2) 時間・空間とはなにか ……………3
 - ii-3) 真理とはなにか ……………4
 - ii-4) カテゴリーとはなにか ……………4
 - ii-5) 経験という実りゆたかな低地 ……………5
- III. おわりに……………5
- IV. 参考・引用図書、図書案内 ……………6



I. はじめに

『認識論～西洋思想史とカント～』と銘打って行なわせていただいた勉強会とは別にこの資料を配布した意図は、いくつかある。まず第一に、カント著『純粹理性批判』は、限られた時間内の勉強会で発表するにはあまりに膨大であり、かつ相当に難解である。そもそもが、専門でもない学部生の私如きに理解できる内容では到底ありえない。よって私に出来ることと言えば、カント研究者たちの解説書を抜粋し、整理し、ほんのちょっと私の解説を加えることくらいであり、しかしそれでは勉強会の本質に背くことになるだろうと考えたからである。第二に、特に新入生部員に対し、入学間もないこの時期に哲学の一専門分野を解説することに重要な意義を見いだせなかったからである。それよりむしろ、「哲学するとはどういうことか?」「今までの哲学者たちは何を考えてきたのか?」を紹介し、少しでも哲学的思考への道を開くことのほうが重要だと考えた。第三に、哲学を詳細に解説されると総じて眠くなる。自分が聴衆の立場になったときのことを考え、具体的な解説は文書によることにした。

既に思想史的知識を有している（であろう）上級生、ならびに勉強会を通じて少しでも哲学の道を歩もうと思った新入生の部員各位に、ぜひ本資料を読んでいただきたいと思っている。

本資料を読めば、少なくとも教科書的には純粹理性批判を語れるようになるだろう。

II. 純粋理性批判“超”入門

i-1) イマヌエル・カントとは

はじめに、著者であるカントのプロフィールについて簡単に述べる。カントは、1724年に東プロイセンの首都ケーヘニスベルグ（現ロシアのカリーニングラード）に生まれた。16歳のときケーヘニスベルグ大学哲学科に入学し、卒業後は家庭教師などをして貧しく暮らした。1770年、45歳のときケーヘニスベルグ大学の論理学正教授就任。その後〈沈黙の10年〉と呼ばれる時代に入り、1781年、57歳にして『純粋理性批判（第一版）』を出版。続いて1783年にはその入門書である『プロレゴメナ』を、1787年には第二版を出版し、1788年『実践理性批判』、1790年『判断力批判』を出版。この間、二度大学総長を務めた。

一般に、カントは「暗く、生真面目」と評されることが多いが、実際のところ陽気でウィットに富み、社交的であったとされる（ただし、一度たりとも授業の遅刻や休講はない）。読書はあまりせず蔵書も少なかったが、弟子のヤハマンの伝記によると「一切を自分自身の内に見出し、他人の内になにかを見つける能力を失ってしまった」らしく、友人と夕食をともにしては「自分の代わりに本を読んで、自分の思想となにかが違うのか教えてくれ」と頼んでいた。1804年、79歳で老衰のため死去。最後の言葉は「よろしい (Es ist gut.)」

i-2) 純粋理性批判の成立

カントは、ほとんど著作を残さなかった〈沈黙の10年〉を経て、ドイツ語で900ページにも及ぶ『純粋理性批判』を数ヶ月の期間で著した。『純粋理性批判』に至るまでの思索の道のは1770年の教授就任論文『感性界と知性界の形式と原理』（以下、『70年論文』）や、友人と交わした書簡、メモを通じて伺い知ることができる。

『純粋理性批判』に、以下の重要な一文がある。

”私たちは、〈物自体〉としての対象についての認識を持つことはできず、感性的直観の対象となるもの、つまり〈現象〉についてのみ、私たちは認識することができる。このことを、この『批判』は明らかにしていく。”

これは、〈物自体〉と〈現象〉の峻別に関して述べた部分である。簡単に説明すると、〈物自体〉とはものそのものことであり、それがなにかによって認識されたり、知覚されようとするとは無関係に、つまり、他とは関係なくそれ自体で存在するものをいう。一方〈現象〉とは、私たちの知覚や感性的直観の対象となるものである。つまり〈現象〉とは「物自体、つまり対象そのものが、私たちの知覚や直観という認識能力によってとらえられた姿。言い換えれば、私たちの認識能力によって変容されながらも、とらえられた物自体」と呼べる。

『純粋理性批判』において、〈現象〉こそ客観的妥当性を主張しうる認識の〈対象〉であって、〈物自体〉は正当な認識の対象にはならない、と主張したのである。

カントは、『70年論文』の時点では知性によって〈物自体〉を認識できると考えていた。しかし、形而上学への問いを深めていくうちに、人間の認識構造そのものを問いたださねばならないことに気がついたのである。そのために、感性的認識の弱点、すなわち個々の諸主観が異なるに応じて認識が異なる、という意味の主観性が払拭されねばならなかった。そして、『70年論文』において、

”感官と経験とによる認識はすべて単なる仮象にほかならず、純粋な悟性と理性との観念のうちにのみ真理は存在する”

と述べていたのに対し、『純粋理性批判』においては、

”単なる純粋悟性や純粋理性からする物の認識はすべて単なる仮象にほかならず、経験のうちにのみ真理は存在する”

と、カントの思索は到達することとなった。カントは、真理性の保障を伝統的形而上学のよ
うに神に求めることはせず、人間の悟性が、感性との合一によって成立させる現象に認識の対
象を限定することによって、人間的認識の客観性を保障した。つまり、『純粋理性批判』は、
真理成立の根拠を神から人間へと奪い取ったと表現できるのである。

ii-1) 形而上学とはなにか

”この両学（数学と自然科学）と形而上学との比類が許すかぎり、形而上学において少
なくとも試みに数学および自然科学を模倣してみたかどうか、ということである。我々は
これまで、我々の認識はすべて対象に従って規定されねばならぬと考えていた。そこで、
対象が我々の認識に従わなければならないと私たちが想定することで、形而上学のいろ
いろな問題がもつとうまくいかないかどうかを、一度試してみたかどうかだろう。”

有名な「コペルニクス的転回」は、以上のような文脈で語られた。ここで、認識が対象に従
うのではなく、対象が認識に従うというアイデアが提示されることになる。

”私たちがア・プリオリに認識するのは、私たち自身がそのうちへと置き入れるものだ
けである、ということこそ、私たちが思考法の変革的方法として考えているものである。”

つまり、私たちが何か他のものを認識した、と考えているとき、そこで認識されているのは、
他のもののうちにある自分自身である、ということである。

通常、形而上学と言えば神や靈魂の存在などを問う学問のことを指すが、カントが確立しよ
うとした形而上学はこのように世界の側の超越的存在がどうなっているのか、という関心で探
求されるテーマよりも、人間認識の根本的構造を問うこと、つまり、そもそも私たちが対象を
認識するための条件や構造はどうなっているのか、という問題が、「形而上学」ということで
考えられており、カントはそれを「超越論的」と名付けた。

ii-2) 時間・空間とはなにか

”我々は、時間の経験的実在性を主張する。しかし我々は、時間に絶対的実在性を与え
ることを一切拒絶する。”

カントは、時間・空間はものそのものが成立するための条件ではなく、ものについての人間の認識が成立するための条件であるとした。つまり、時間・空間はものの側にあるのではなく認識する側にあるというのである。また、時間・空間を通さない世界はまさに物自体の世界であって、人間は時間・空間の枠内にある〈現象〉しか知り得ない、とした。

ii-3) 真理とはなにか

「真理とはなにか？」という問いは、哲学の出発点と呼んでも過言ではなく、古今東西を問わず哲学者や宗教家、あるいは科学者を悩ませてきた難問である。哲学史上、「真理」の定義としてもっとも基本的なものは対応説的真理概念（真理とは事物とその認識との合致）である。カントはこの真理観を前提として、以下のように述べている。

”この基準にあつては、認識のすべてが捨象されているのに、真理はまさしくこの内容に関わるのであるから、認識の内容の真理を問うのは、全く不可能であり不合理であるということである。（略）こうした要求はそれ自身において矛盾したことなのである。”

すなわち、そもそも「真理とはなにか？」という問いそのものに問題があつて、もはや答えなど出せるわけがない、というのである。しかし、カントは真理に対する追求を諦めたわけではない。カントは、そもそも私たちの認識が客観的に成立するとはどういうことかという根本、「超越論的真理」を探求すべきだとした。

ii-4) カテゴリーとはなにか

”ところで、経験は、きわめて異なる二つの要素、つまり、認識の質料と、この質料に秩序を与える形相とを含んでいる。”

時間・空間とは、人間の認識が成立するための条件であることは上に述べた通りである。時間や空間を通じた現象は感性によって受け取られるが、それ自体は無秩序であり混沌としている（ヒュームのように、因果関係の否定にもなりかねない）。この感性によって受け取った素材を、なにか意味のあるもの、脈路あるものとして構成するのが悟性の力（純粹悟性）なのである。注意されたいのは、悟性の統覚の働きは、単に対象の認識をする、のではなく、そもそも認識の対象の成立それ自体に関わる、ということである。

カテゴリーの種類

- | | | | |
|----------|---------|-----------|---------|
| ①分量----- | (1) 単一性 | (2) 数多性 | (3) 相対性 |
| ②性質----- | (1) 実在性 | (2) 否定性 | (3) 制限性 |
| ③関係----- | (1) 付属性 | (2) 原因性 | (3) 相互性 |
| ④容態----- | (1) 可能 | (2) 現実的存在 | (3) 必然性 |

我々の「知」でなぜ世界の「存在」を知りうるのか、という疑問に対するカントの答えは、世界（カントの場合、〈現象〉）の成立そのものに人間の主観的原理であるカテゴリーが関係しているから、というものだった。”経験の可能性が、同時に経験の対象の可能性である”

ii-5) 経験という実りゆたかな低地

”悟性がア・プリオリになしうるのは、可能的経験一般の形式を先取的に認識することである”

カントが目指したのは、なにより〈人間〉的認識の基礎づけを行うことであり、その真理性の根拠を神ではなく人間に求めることであった。人間の知性（悟性）によって成立する現象に、認識の対象を限定することによって、人間的認識の客観性を保障したのである。つまり、『純粹理性批判』では個別的な内容をもった個々の具体的な認識の真偽が問題なのではなく、そもそも人間が経験的認識を可能にする原理を確立させることが重要だったのである。

我々は神的存在ではないため、経験の対象を自ら生み出すことはできない。我々が経験に先立って行うことができるのは、具体的な経験との出会いをあらかじめ可能にするような〈経験の地平〉を確定させることだけであり、何が真で何が偽であるかの判断は、この地平が引かれた上ではじめて個別具体的に考察しうるのである。

”個別的諸法則を知るためには経験がつけ加わってこなければならない”

伝統的な真理観で「真理」は体系のうちにあったのに対し、カントはそれを経験との出会いによってはじめて得られてくると主張した。この出会い〈方〉、あるいは、出会えるものの可能性を確定すること、すなわち経験の地平の確立のみがア・プリオリになしうる最大のことであり、出会えるものをあらかじめア・プリオリに獲得しようとすることは人間認識の限界を超えている、と主張した。真理は、ア・プリオリに先取されたり、体系性の「高い塔のうち」に存するのではなく、「経験という実りゆたかな低地」にこそ見いだせるのである。

こうして、経験論と合理論とは調停され、ドイツ観念論が産声を上げることとなった。

III. おわりに

大学生活は「人生の夏休み」と揶揄されることがある。私がこの残り半ばを切った「夏休み」の自由研究として選んだのが、純粹理性批判であった。ご存知の方も多いと思うが、私は弁護士を志す者として来年夏に法科大入試を控える身である。であるならば、本来私が取り組むべきは法学の勉強に他ならないという真つ当な意見も聞こえてくる。しかし、自由研究は研究対象が自由だからこそその自由研究なのであって、今後一生かけて法学の道を行かねばならぬのに〈夏休み〉にまで勉強することもなかろう、と考えたのである。

それにつき、『善の研究』と並んで旧制高校生必読の書と呼ばれた本書は、研究の対象として実に良い選択であったと思う。幾度も読み返しそして一向に理解できたとはいえ難いが、それにしても歴史的名著に全力で取り組めたのは良い思い出になると思うし、西洋（思想）史を再整理したことは今後の学習にも役立つだろう。ただし、本資料にも書ききれない部分が山ほどあった（そして、その部分もまた面白い）ので、ぜひ皆さんも図書案内を活用して哲学に触れてみて欲しい。もし、部員の誰かが本勉強会を通じて哲学に興味を持ち、某かの哲学を自由研究のスパイスとして加えてくれるなら、幸いである。

IV. 参考・引用図書、図書案内

※プレゼンに使用したものを含む。参考考文献には〈参〉、引用文献には〈引〉、推薦図書には〈推〉印をつけた。なお、表示は順不同である。

〈参・引・推〉貫成人『哲学マップ』（2004年）ちくま新書
→哲学を学ぶ前、あるいは再整理する際にぜひ読んでいただきたい。プレゼン資料を作成するにあたってはほとんどこの本の流れに沿って作成した。索引があり、簡易な哲学事典としても使える。

〈参〉奈落一騎ほか『あらすじとイラストでわかる哲学』（2011年）イースト・プレス
→コンビニに売ってた。たぶん絶版。ザ・大衆向けで相当わかりやすいので、今後たまにコンビニの本棚見てみようと思った。

〈参〉佐藤次高ほか『詳細世界史改訂版』（2009年）山川出版
→なんだかんだで、歴史の流れをつかむのには一番良い。参考書でも良いので、大学入試用の世界史の同類のものは手許に置いておきたい。

〈参・引・推〉黒崎政男『カント「純粋理性批判」入門』（2000年）講談社選書メチエ
→一番最初に読むカント入門書としてはベスト。本資料を作成する際に大いに参考にした。

〈参・引〉竹田青嗣『完全解説カント「純粋理性批判」』（2010年）講談社選書メチエ
→二冊目に読む入門書。原書と並行して読むと良い。入門書とはいえ、本腰をいれて読まないと絶対に挫折するので注意。

中島義道『哲学の道場』（1998年）
→最初と最後の章が「はじめに-哲学はやさしくない」「おわりに-哲学は役に立たない」であることから既にぶっ飛んだ内容なのが伺える。もし哲学の沼にはまりそうになったら読むと良い。

森炎『死刑肯定論』（2015年）ちくま新書
→タイトルのわりに著者の主張が弱いのだが、従来の死刑存廃論が綺麗に整理されており、フーコーの権力論など、哲学的思索を現実問題にあてはめるケースブックとして最適

〈参〉哲学的な何か、あと化学とか (<http://www.h5.dion.ne.jp/~terun/index.html>)
→哲学史や個別問題など、5分程度で読めるコラムが多くあり、通学時などにおすすめ

京都大学哲学研究会 (<https://sites.google.com/site/kyototekken2011/>)
→哲学と言えばやっぱり京大。雄辯部のように資料を公開しているので部外者でも閲覧できるのだが、そのレベルの高さたるや自分が本当に恥ずかしくなりました。

〈参〉『正義論』 (<http://www.meiji-yuben.net/rec/2013/benkyoukai20130615sakurai.pdf>)
→櫻井先輩の勉強会資料。とんでもなくコンパクトにまとまっています。